OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コロナ禍の最中のWHO西太平洋地域事務局着任
Author(s)	芝田, おぐさ
Citation	目で見るWHO. 2021, 76, p. 26-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86488
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コロナ禍の最中のWHO西太平洋地域事務局着任

世界保健機関西太平洋地域事務局（WPRO）
Partnership in Technical Cooperation, Technical Officer / Nursing Officer
芝田 おぐさ

看護師、保健師。上智大学法学部卒、聖路加国際大学卒、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院修了。聖路加国際病院、厚生労働省医政局看護課、医療安全推進室、大臣官房厚生科学課などをへて、2020年4月にWPROに出向。

厚生労働省からWHO西太平洋地域事務局への出向

フィリピン・マニラにあるWHO西太平洋地域事務局（WPRO）にPartnership in Technical Cooperation(PTC) / Technical Officer として着任して、もうすぐ1年が経ちます。私の職務は、WPROにおける日本案件や日本に関連する業務をファシリテートすること、日本の拠出金の管理を行うことなどです。

厚生労働省で新型コロナウィルス感染症対策対応中の辞令

私は厚生労働省の看護系技官で、WPROには出向での赴任です。厚労省内に緊急設置された新型コロナウィルス感染症対策本部の一員として、昼となく夜となく対応にあたっている最中でした。これまでの人生で最も忙しく、極限状態で働いている中でのWPROへの辞令でした。引っ越しなどの準備もほとんどできないまま、着の身着のままでマニラに向かいました。

WHO西太平洋地域事務局へ、感染管理下での就業

4月7日に日本政府が7都府県に緊急事態宣言を発令した1週間後、私はWPROに赴任のため、成田空港からマニラのニノイアキノ空港へ向かっていました。世界中で厳しい水際対策措置をしていたため、成田空港はまるで自分以外の人が忽然と消えてしまったのではないかと錯覚するようでした。マニラに到着後も、当時マニラ首都圏は最も厳しい都市封鎖をしていたため、物流もライフライン等に関連するものしか認められておらず、マニラに象徴的な街の喧騒や車の渋滞はなく、人通りもほとんどない状態でした。スーパーくらいしか開店していません。街の静寂の中にニワトリの鳴き声が響き渡っていたことを印象深く覚えています。

マニラ到着翌日から地域事務局勤務が始まりましたが、感染管理の観点から事務局職員約300人のうち50%から75%はテレワークで就業することになっており、ソーシャルディスタンスがしっかり保てる環境が整備されていました。マニラの市中感染の状況は長期に及び、フィリピン全体では継続的に2000~4000程度の感染者数が報告されています。そんな中、事務局職員に陽性者が出ることも当然ながらありますが、そういったインシデントが発生した場合、即座に事務局独自に接触者追跡が行われ、濃厚接触者は自宅待機を指示されます。このような日々の厳格な感染管理のもと、これまでに事務局内でクラスターが発生したことはありません。

私の前任者は日本の拠出金の執行状況について視察するため、定期的に加盟国への出張をしていましたが、私は着任以来、日本以外の出張は一度も経験できていません。国際保健の現場を直接見ることができないのはとても残念に思います。いい面としては、Virtualでの会議が増えたため、多くの国の会議に効率的に参加できていることでしょうか。

WPROでの私の役割と葛西地域事務局長

前述した通り、私の役割はWPROにおける日本案件や日本に関連する業務をファシリテートすること、日本の拠出金の管理です。比重として大きいのは前者です。ご存知のとおり、西太平洋地域事務局長は日本人の葛西健先生です。葛西地域事務局長への日本からの取材や講演依頼の対応も多く、その対処方針や講演内容について地域事務局長と相談しながら準備を進めています。関係部署と連絡を取り合い最新の情報を収集したり、地域事務局長のメッセージが日本の方々に正確に、分かりやすく伝わるよう、プレゼンテーションの資料作りに特に気を使っています。

葛西地域事務局長は感染症や健康危機のエキスパートであり、西太平洋地域事務局の感染症対策や健康危機管理の体制づくりに長年尽力し、成果を上げてきました。新型コロナ感染症対策においても常に先を見据えています。これまで葛西

❶赴任時の成田空港（後ろのフライト掲示板の赤いのはすべて欠航となったフライトです）
❷都市封鎖中のマニラ市内の道路（手前には「Frontliner Service」と掲示した車）
❸ベトナムの看護カンファレンスで講演（マニラからバーチャルで参加）

地域事務局長の発言の中で印象に残っているものに以下のものがあります。「一人ひとりの行動変容を基礎にし、その上で、公衆衛生措置と社会経済活動を高次元でバランスさせ、新しい常態を模索することが重要」（4月時点）、「個々人の感染症対策は、自分のためだけでなく、自分の家族やコミュニティへのためにも重要」（5月時点）、「これからはニューフェーズに入る。各国は感染拡大を受け、その抑制対策を行い、その後は感染拡大と抑制を繰り返しながら収束に向かう」（7月時点）、「世界のどこかでウイルスが流行している限り、どの国も感染リスクはなくならない。だからこそ国際的な連帯が必要」といったものです。これらの発言内容は、今となっては当たり前のように世の中に受け止められていますが、当初は他にそのような発言、考えをする人は稀で、事務局内にもこれらの発言を真に理解している人は多くはなかったように思います。新型コロナ感染症が世界で猛威を振るうこのときに、葛西地域事務局長のリーダーシップの下、直接指示を仰ぎながら働くことができることは、大変貴重で稀有な経験をさせていただいていると感じています。

ナーシングオフィサーとしての役割

着任後しばらくして、当初の職務に加えてナーシングオフィサーを任命されました。これまでWPROにナーシングオフィサーはいなかったため、その役割について考えるところから始まりました。大きくは西太平洋地域内に特有の看護師・助産師の課題に取り組むこと、地域事務局政策文書「未来に向けて（For the Future）」の実現に向けて看護職が貢献できることを促進することが自分の任務だと考え、今後の具体的アクションの計画立案をしています。

厚労省とWHOの双方の業務を経験して

厚労省の技官は、通常は2年~3年ごとに異動があるので、WHOの職員のように特定分野で専門性を極めながらキャリアを積むことが難しいと感じています。ただ、技官としての専門性を持った行政官（私の場合は看護師としての観点、専門性を持った行政官）として経験を積んでいることを実感します。厚労省内のどの分野、部門にいても、基本的な行政プロセスは変わりません。調査・研究の結果を解釈し、ステークホルダーとの協議内容、専門家の意見を総合的に勘案し、何が国民にとって最もよい政策なのかを考え、具体的な制度に結び付けていきます。

WHOで働くまでは、WHOの役割は「基準作り」が重要だと思っていましたが、実際は各国保健省へWHO国事務所を通じた「技術的助言」が中核であると感じています。高度な専門性、科学的根拠と経験に基づく「技術的助言」は、一方的に「指導」するものでは決してなく、WHOは飽くまで黒子でありつつも、保健省とともに二人三脚で政策立案や現場でのオペレーションを執行しています。各国政府にとって効果的で有用な助言ができるWHO職員となるためには、特定の分野に特化した高度な専門性ももちろん重要ですが、行政的観点を持つことも大変重要だと感じています。これからWHOを目指す方々に何かアドバイスができるとすれば、自分の専門を深めつつ、ぜひ行政的観点や行政プロセスについても興味を持って学ばれると、WHOに入ってから大きな武器になるのではないかと思います。